

## 「音楽をする喜び」を感じる授業の実践

音楽科 峰村 美智子

### 1 はじめに

本校の共同研究では、平成14年度から3年計画で『「確かな学力」を身に付けさせる学習指導の在り方』を全体テーマとして研究を行ってきた。そこでは、「学ぼうとする力」（意欲・態度）に視点を当て、授業改善をしていくこと、つまり、授業改善の手だてとして、学習意欲に関わる学ぶ楽しさに着目して生徒の「学ぼうとする力」を育てていきたいと考えてきた。

本校音楽科では、学ぶ楽しさを実感させるために、多様なそれぞれの音楽のよさを味わわせていくことで、音楽活動に取り組む意欲を高め、なお一層広く深く音楽を愛好する心を育てていきたいと考え、研究を進めてきた。授業を実践していく中で、音楽の授業において「楽しさ」が生まれる状況は三つに集約されたことを受けて、ここでは、心から音楽を愛好する生徒の育成を目指すため、授業の改善をしてきた実践事例とその成果および課題について述べていきたい。

### 2 生徒の実態

音楽の楽しみ方は十人十色であるが、音楽を好きだと感じている生徒がほとんどであり、音楽に対する関心は高い。家庭における音楽環境にも恵まれていると思われるが、多様な音楽を耳にする機会が多いため、歌唱、器楽、鑑賞といった授業にも多くの生徒が感心を示している。

生徒が好む学習形態は、個々の興味・関心に基づく課題学習と小集団学習である。これらの学習を好む理由は、自分たちで自由に活動できることが嬉しいということが最も多かったが、音楽活動の目標を見失いがちであったり、互いの感性を高め合ったりする場面が見られなかったりするなどの問題点もある。また、試行錯誤しながら学習する過程では、自分の意見を押しつけてしまったり、周囲を気にしすぎて思っていることを言えなかったりするなど、互いを認め合いながら学ぶことが上手にできない生徒も多い。

そこで、他者とのかかわりを意識した効果的な小集団学習や自ら体感することで音楽をする喜びを共有できる場の設定をすることにより、音楽のすばらしさを実感し、互いに学び合うことができる授業を構築していかなければならないと考える。

### 3 育てたい能力・態度

自分で気付き、それを感じ取る心の動きを感性というのであれば、「思考力」「判断力」「実践力」「想像力」の源は感性である。様々な音楽活動を通して「音楽そのもののよさ」を感じたり、「人と一緒に創り上げていくことの喜び」を感じたりすることにより、あたかみのある感性が磨かれ、感受性が育つのではないか。また、音楽活動の中で試行錯誤して何度ももう駄目だと思っているうちに、ふと目の前が明るくなり、何度も繰り返し考えていくと少しずつ自分の表現したいものが姿を表してくることがある。表現とはそうし

たものであり、他から認められ、受け取ってもらえることで、自分の感性を十分に働かそうと意欲的になり、さらに、表現する技能の向上にもつながると考える。

学校教育における音楽科のよさとは、音楽活動を通して、人と人とのつながりや調和を大切にしようとする態度を育てるところにあると考える。そこで、互いの音楽性やよさを感じ合い、様々な感性に触れる場を設定することにより、音楽を感じたり、音楽によって心を揺さぶられたりするなど、感受性豊かな生徒を育成したい。また、音楽のすばらしさを知るきっかけを作り出す中で、生徒が意識的に音楽を「聴く」ことによって、情操を育み続けていければ、より心豊かな生徒を育成することができるのではないかと考える。

#### 4 研究の概要

まず、一題材後に行う自己評価の結果から、音楽の授業を楽しんでいるのは、感動や新しい発見、達成感や成就感があった時であることがわかった。このような気持ちは、主体的な活動の中でこそ味わえるものであり、その後の追究していく力につながっていくものと考えられる。そこで、「新たな発見による楽しさ」「音楽の技能を習得したことによる楽しさ」「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」の三つを生徒に実感させたい。

また、この三つの楽しさに関する生徒の実態を分析するため、学習意欲調査を実施した。この結果をみると「新たな発見による楽しさ」については、自分の知らない音楽や楽器に出会い、それを体験することについては、約8割の生徒が実感している様子が見えた。しかし、自分が表現したいイメージを、旋律やリズムなどを工夫して表現することについては十分に好奇心を高められていないことがわかった。また、「音楽の技能を習得したことによる楽しさ」については、一通り演奏ができるとそれで満足してしまい、より豊かに表現を工夫しようとする態度に欠けていることがわかった。しかし、「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」については、表現活動だけでなく、鑑賞活動においても、約8割の生徒が実感している様子が見えた。

この調査結果をもとにし、これら三つの「楽しさ」を実感させられるような授業改善を実践し、その結果をもとにし、研究がどうであったか、その成果と課題をまとめることとする。

#### 5 授業改善の手だて

音楽は、息や気持ちを合わせたりすることで得られる集団の心が一つになった喜びや言葉では言い表せないくらいの感動を味わったり、その感動を共有したりすることができる。

そこで、授業改善の手だてを次の三つとして取り組んだ。

##### — 授業改善の手だて —

- |   |                                    |
|---|------------------------------------|
| ア | 互いの音楽性やよさを感じ合い、様々な感性に触れることができる教材開発 |
| イ | 体感することで音楽をする喜びを共有できる場の設定           |
| ウ | 他者とのかかわりを意識した効果的な小集団学習             |

これらは、自分一人だけでは得ることができないものであり、他者との人間関係が大きく影響される。音楽は集団の中でこそ個が生きることを実感できる教科なのではないか。互いにアイディアや意見を出し合い、表現力や創造力を練り上げていくことができれば、きっと感動を共有できるであろう。そして、自分の音楽観のひろがりを実感することで、自分一人ではなく、他者と共に音楽をする喜びを味わうことができるのではないか。そのためにも、音楽の授業は共に学ぶ場、共に音楽をする喜びを分かち合う場であり、多様な価値観が響き合う場でありたいと考える。

そのためには、自然に他者とかかわり合うことができる場を設定し、よりよい音楽表現を求めて試行錯誤しながら追求しようとするのが大切となる。そこで、この三つの手だてを中心に授業改善をしていき、よりよい方策を思案しながら、研究を進めた。

## 6 「音楽をする」喜びを感じる授業を実践するために

### (1) 互いの音楽性やよさを感じ合い、様々な感性に触れることができる教材開発

これまで様々な題材を使用してきたが、やはり、題材が良ければそれだけで、楽しい授業を構築することができる。それらの共通点は、生徒の興味・関心ある題材を選ぶことである。それは次の条件を満たすものである。

- ① 音楽そのもののよさを感じることができる。
- ② 気持ちを表現したり、他者の感じ方や表現の方法を知ることができる。
- ③ 音色や表現の特徴の違いに気づいたりすることで、聴取の深まりを感じることができる。

このような題材を開発することは、情意面の高揚に占める割合は大きいと考える。

### (2) 体感することで音楽をする喜びを共有できる場の設定

音楽は調和を大切に考えていく教科である。例えば、息や気持ちを合わせたりして、集団の心が一つになった喜びや言葉では言い表すことができないくらい鳥肌がたつほどの感動を味わったりすることは、みんなでその感動を共有することになる。それらは、人と人とのつながりや調和につながり、豊かな心を育んでいく大きな力になると考える。そのためには、その本質に迫り、体感する場をより多く設定していくことが必要である。

### (3) 他者とかかわりを意識した効果的な小集団学習

それぞれ違う個性を持っている集団が「学級」である。その違いを感じる中で、互いの存在を認め合い、それぞれのよさを伸ばし合うことが、音楽のすばらしさを学び合うことにつながるのではないか。そして、「人と一緒に創り上げていくことの喜び」を感じることで、感性が磨かれ、感受する力が育つのである。そこで、自己を見つめ、互いを認め合える効果的な小集団学習と一斉学習のバランスを考えた授業を構築していきたいと考える。生徒一人一人の主体的活動を促し、教師が支援を中心とした活動で関わることで、学び合い高め合うことにより、学習効果を上げることができると考えたからである。それには、生徒と教師、あるいは生徒同士での十分なコミュニケーションがなければ、楽しい授業展開とはなっていないと考える。

## 7 授業改善の手だてアを实践した研究の評価

### (1) 第2学年 「CM音楽の創作」

学習意欲調査の中で、自分が表現したいイメージを、旋律やリズム等を工夫して表現することについては苦手意識をもっている生徒が約4割いたことを受けて、関心・意欲が高まる学習教材を開発することにした。そこで着目したのは、身近な音楽として毎日テレビから流れているCM音楽である。なぜなら、限られた時間の中でCMが視聴者に訴える内容は様々であるが、本来の営利目的を越えて一つの作品と呼べるほどのものも多いからである。これらを受けて、本題材では、実際にCMで使われている商品を使い、「自分だったらこういう曲を使う」という内容で取り組むこととした。まず始めに、コマーシャル・メッセージの研究として、印象に残るCMやCM音楽のもつパターンを知り、分類していく中で創作活動への理解を深めるという学習活動を取り入れた。これは、CM音楽を創作するために必要な知識として、なぜ印象に残るのかを話し合い、音楽を流すタイミングや曲の特徴について分析することで、よりよい創作活動にするための秘訣を探るものである。次に消費者の購買意欲を駆り立てるには、具体的に何を宣伝し、どんなセールスポイントを情報として伝えることが大切かを考えさせた。その上で、創作活動が円滑に進められるように、商品名(会社名)のみを旋律にしたり、セールスポイントと商品名(会社名)を組み合わせる旋律にしたりするように助言した。これは、キャッチコピーを考えて、それを受けて音楽が流れるという形で作っていく。商品名を色々なリズムで言い続けていき、言葉を旋律化させていったり、セールスポイントを旋律化するために、わかりやすく短い歌詞を考えながら作ったりしていくことで、音楽的創造力を高めるための手だてとして有効なのではないかと考える。また、音楽を含めたCM音楽作りをすることにより、より規模のおおきな総合芸術への興味・関心を持つことにつなげていきたい。

#### ア 授業改善のポイント

調査結果から、比較的身近な音楽に焦点をあてた授業を展開することにより、生徒の興味・関心をより高める。また、互いの作品を評価することで、音楽性が高まり、互いを認め合うことでよさを感じ合わせる。

#### イ 授業の考察

日常的に見慣れたものを作るという点では、どのように表現すれば効果的であるかということについて、生徒はある程度予備知識をもっており、指導がしやすかった。また、「先生、〇〇のCM知ってる？キャッチコピーの後にまずムード借用型がきて、映像が変わったら一発型で締めくくるんだよ。うまく作ってるよね。」など、生徒から話しかけられることがあり、生徒の興味・関心を高める教材開発ができたのではないかと考える。活動にあたっては、発想が単純で表現を工夫することができない生徒もいたが、創作過程で互いの進行状況を知ることで、旋律の作り方やリズムの工夫を知ったり、学び合うことができる場を作ったりすることにより改善される様子も見られた。また、他者とのかわりを意識しながらグループを構成する小集団活動を取り入れ、互いに認め合い学び合う場を設定したりするなどの手だてを講じた。これは、創作活動の基礎・基本が理解できたことで、「自分にもできるんだ」という自信が楽しさにつながったのではないかと考える。そして、それらは互いのもっている音楽性やよさを感じ合うことができる教材開発の一つになったと考える。

## ウ 使用した学習プリント及び生徒の作品

学習活動2 CMを作ろう① 2年 組 番 氏名 ( )

会社名: ロッテ 商品名: ホロロン

★具体的に何を宣伝するのか。  
ほろろ

★どんなセールスポイントが言いたいのか。  
ほろろがおいしいところ  
あったかいところ

★ねらいはどんな題なのか。(幼児・児童・中高生・OL・主婦・働く女性・働く男性・お年寄り・スポーツマン・病気の人・その他・・・)

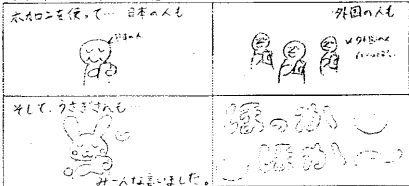
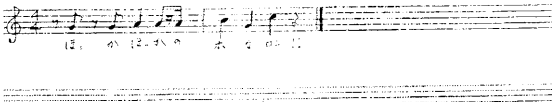
世界中の人(とんぼでも)

★放映の時間帯は?どんな番組の前?後?  
夕食の時間帯

学習活動3 CMを作ろう②

◎連珠型(A-1) or 二珠型(A-2) or セールスポイント+商品名(会社名)型(A-3)でオリジナルCMを作ってみよう。

★絵コンテ(4コマまんが)と楽譜

学習活動2 CMを作ろう① 2年 組 番 氏名 ( )

会社名: エイブル 商品名: 住宅

★具体的に何を宣伝するのか。  
住宅がネットできかせる。

★どんなセールスポイントが言いたいのか。  
ネットできかせる  
いい部屋みつけ。

★ねらいはどんな題なのか。(幼児・児童・中高生・OL・主婦・働く女性・働く男性・お年寄り・スポーツマン・病気の人・その他・・・)

学生

★放映の時間帯は?どんな番組の前?後?  
6時以降

学習活動3 CMを作ろう②

◎連珠型(A-1) or 二珠型(A-2) or セールスポイント+商品名(会社名)型(A-3)でオリジナルCMを作ってみよう。

★絵コンテ(4コマまんが)と楽譜




## エ 自己評価からみた授業改善の評価

以上のような結果を踏まえ、生徒が学ぶ楽しさを実感できる手だてが有効であったか、題材終了後の自己評価をもとに考察した。

質 問 項 目	答え(どちらかに○)
○ 意欲的に創作活動に取り組むことができた。	は い い い え
○ この「CM音楽作り」という授業は、自分にとっておそらく、楽しい授業だった。	は い い い え
○ この授業で、自分の表現したいことを話したり、わからないところを友達に質問したりするなど、互いに学び合うことができた。	は い い い え
○ 互いの作品のよさを認識できた。	は い い い え

まず、大多数の生徒が、この授業に対して意欲的に課題に取り組み、自分にとって面白く、楽しい授業であったと答えている。本時の教材は、生徒にとって身近な内容であったため、意欲的に課題に取り組み、自分にとって面白く、楽しい授業であったという結果が得られたのだと考察できる。

次に、小集団活動を取り入れ、他者とのかかわりを意識しながら実施することにより、学ぶ楽しさが実感できたかについてであるが、約86%の生徒が十分な意見交換ができたと答えている。感想の中には「自分一人でわからなかったところを、友達にきいて意見を交換することで、作品が仕上がったので楽しかった」、「友達と意見を交換することにより、よいアイデアが浮かんだ」「互いの作品を評価することで、いろいろな表現を知るよい機会になった」など、小集団活動が課題解決に有効であり、その活動を通して「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」を感じ取っていたと考えられる。

## 8 おわりに

今年度は、「新たな発見による楽しさ」「音楽の技能を習得したことによる楽しさ」「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」を実感させられるような手だてを講じた結果として、「学ぼうとする力」がどのように変化したのか、検証を行った。「学ぼうとする力」は、内面的な力であるため、すぐに結果として表れるものではない。しかし、題材終了時に行っている自己評価を見てみると、授業が楽しいと感じている生徒が増えたりするなど、本研究の成果はあったのではないかと考えている。

また、少ない授業時数の中、指導内容が多くなることも多々あり、ゆとりをもった指導を心がけていく必要があると痛感した。

さらに、「音楽をする喜び」を感じる生徒の育成についてであるが、関心・意欲などの情意面の育成が重要視されることになるを考える。大切なことは、新しい知識の発見や技能を身につけることによる喜びや達成感・成就感を得ること、個々の感性に訴えかけることで得られる感動体験を共有すること、そして、そうした学習を積み重ねていくことで、音楽をする喜びを実感していることであるとする。自己評価の結果からも考察していくと、少しではあるがそれらが育成されつつあるように思われる。

今回は、実践例と自己評価の結果から本研究の評価を試みたが、アンケート調査を検討し、さらに、自己評価の方法も再度検討することを今後の研究課題としていきたい。

## 【引用・参考文献】

- ・日本学校音楽教育実践学会編：「音楽の授業における楽しさの仕組み」、2003年
- ・芸団協、芸能文化情報センター編：「なぜいま学校で「表現教育」なのか？」  
2003年
- ・宇都宮大学教育学部附属中学校：「第49回公開研究発表会要項」、2003年